

子どもたちの明るい未来のために語り継ぎます

私の戦争体験

第20集 夏の班長会・班会 平和学習資料



いづみ

1998年6月

退院の日の大阪大空襲

富田林市 中西 妙子

昭和二十年三月十三日夜半、大阪大空襲。港区の方に爆弾が投下されたから、今までと違うと誰もが思い防空壕へ。妹達と四人で眠っていると、「早く逃げんと、もう近くまで燃えて来ている」という母の大聲で飛び出すと、真屋のように明るい焼夷弾が雨あられ。十四歳の妹が四歳の妹をおんぶして、私は六歳の妹に手を引っ張ってもらつて。

そう、私は四十日前に、盲腸炎の手遅れで腹膜にまで及んで、空襲警報の中、真暗な部屋でお腹だけ照らし長時間の手術に耐え退院してきた日。歩く事すら出来ずフラフラ。洗面器一杯の水を持っても、傷口に肉が盛り上らず、安静にと言われたのに、水でぬらしたフトンを頭からかぶり、火の粉の中をそろりそろり炎の少い方へ逃げて行くのです。降り注ぐ焼夷弾で顔や手足が半分焼けている人。顔も判らないくらい真黒になつて、呆然と歩いてる人。リヤカーに石臼をのせて引いて逃げて行く人。親子四人すがりついたまま真黒に焼けてる人（此の家は、お琴を習っていた私の先生）、逃げるのが一歩遅かったのです。まともに焼夷弾を受けたのです。小学校まで四人どうにか逃げました。恐ろしいのと、しないどいので、へたり込んだまま動けません。

母が、家も燃えてどうにも手が付けられないと、懷に位牌、貴重品袋を背に片手にバケツを持って、ススで真黒、目は真赤です。周りの人が水を欲しいと寄ってきます。防火用水だし、燃えかすやゴミだらけ、それでも飲まないと咽喉が焼けついているのです。小学校も燃えてきて危いから逃げろとの命令。私は「もうここに居る。歩けない。死んでもい

い。どうせどこへ行つても又次の所へ逃げるのだつたら、動けない」と体力の限界を訴えたのですが、ここに居たら焼け死ぬと母に引きずつてもらつて大浪橋通りの当り一面燃えつきた所へ。川には人が大勢とび込んでいました。浮かんでいる人は多分死くなつた人々です。妹達も、履物はぬげてしまっています。どの顔も真黒で目は真赤。

十四日は一日中何も口に入れてません。十五日に学校の燃え残りの所へ移り、そこへ親類の人が、おかゆを持ってきました。塩味だけの水のような物なのですが、あの味は忘れられません。警防団の役をしていた父の消息は判りません。母が一度家を見に帰りました。四斗樽の大根の漬物が真ん中でバケツ一杯きれいに残っていたのを持って学校へ来ました。それを欲しいと近くの人が寄ってきます。乾パンをもらつたのが三日経つてからだと思ひます。父も四日目くらいに顔をみせました。それも束の間どこかへ行つてしましました。

六日目に祖母が針中野は焼けてないからと迎えに、あべのから歩いて来ました。一面焼野原。あちこち半焼死体、真黒な死体、防空壕に入つたまま焼けている人、すごい臭いの中を歩いて阿倍野まで。そこから電車だったと思うのに覚えていない。後日父も来ました。半焼死体の人を空地に集めて焼いてきたと、涙ながら語ってくれました。女二人暮しの祖母の家にも長く居られません。幸いにも父の仕事関係の人の物置に六人住むことに。焼けた家の軒先の壕に衣装ケース三杯分の着物が、煙も入らず完全に残っていました。お金で売つてももらえないでお米や野菜に交換して私達のお腹へ。家族の為とは言つても母も辛い事だったと思います。

今、富田林に住んで三十年になりますが、やっとP.Lの花火をみても、あの雨あられの火の粉の中を逃げ歩いている夢をみなくなりました。八月十五日の玉音放送を聞いた場所も、あの一日の事は何も記憶にないのです。田舎で暮らす私達に、妹と二人女学校に通っていたら、近所の人に家が苦しいのに女の子がなんで学校に行くのって聞かれながら、電車の屋根や連結の所にまで人の乗つたすごい乗物でどうにか通学しました。



広島●雪を食べる子どもたち 撮影：佐々木雄一郎



長崎●龍 知江子さん 撮影：山端薫介

うつろ

母は、頭や足は真黒に焦げて
胴体は生焼けでした。

母の姿を見ても
悲しいとかなんかじやなくて
自分自身何か魂の抜けたような

うつろな感じで
……

ここが家だったら
やはり、母かも知れません。

龍 知江子

父も 母も 兄弟も
身寄り一人もいなくなり
その日から食べ物をあさり
野宿し
原爆孤児
げんばくこじ
生きられませんでした。
学校に行くこともできず
病気を治すことも
盗みをしなければ
生きられませんでした。
学校に行くこともできず
乞食の生活でした。
心を支えてくれる
家庭もふるさども
すっかりなくなりました。

自然には逆らえないけれど、戦争は人災。絶対無駄に命を捨ててはならないのです。友もいとこも、祖父も日露戦争の為に命を落して行ったのです。私の命果てるまで、あのむごい光景と逃げ回って肉が盛り上らなかつたお腹の傷とは、永遠に消える事はない。しかし、その後の大坂空襲、他の地の空襲の事も記憶から消えている。一夜で壊滅した浪速区に住んでいた女学校三年生の体験した恐ろしい出来事です。

無言の勇士の凱旋

東大阪市 朝田 きみえ

今年の春も、氏神様の境内に桜の花が、満開に咲いた。通る度に私は桜の木を見上げる。脳裏に半世紀前のことが昨日の如く浮かんできた。「万才」「万才!」と叫ぶ大勢の人の声と日の丸の旗の波の向こうに軍服に白いタスキをかけた人の姿がよみがえつて来た。

私達の町の出征兵士はこの氏神様から出征して行かれた。在郷軍人の役員さんや、大日本婦人会、そして町内の老若男女が大勢参加した。駅までは、青年団の楽隊を先頭に、全員が日の丸の小旗を振り振り行列が続いた。駅に着くと又歎呼の声に送られて出征して行かれた。その当時は、今の小学生で母に連れられて見送りに行き、泣きながら「万才」を叫ぶ人達が不思議であった。目をつぶると母の割烹着と青年団の人気が叩く大太鼓の音が聞こえてくる。何かしら子供心にお祭りの様にも思つていた。(注: 割烹着は婦人会の制服であった)

だが私達児童にも悲しい辛い気持ちになる事にも参加した。

それは無言の勇士の凱旋であった。児童は駅から道の両側に約一メートル位の間隔で並んで立つた。長い時間待っていても誰一人さわぐ事も

くる日も　くる日も
姉と小さな弟を焼く炎の前で
私と母が立ちつくし
そばに小学生の弟も
うずくまつていました。
けれど
その母も、弟も
十日と生きることができませんでした。
生き残ったと思った多くの被爆者も
原爆症にかかり
その年の暮れまでに
ばたばたと死んでいました。

先生
お父ちゃんを助けてください。
あのじつけんさえなかつたら
こんなことにならなかつたのに
こんなおそろしいすいばくは
もう使わないことにきめてください。

水爆はもう使わないで
わたしを最後にしてほしい
原水爆の被害者は
くる日も　くる日も
久保山愛吉さんの葬儀 写真提供：毎日新聞社

一九五四年三月一日、南太平洋のビキニ環礁で行なわれたアメリカの水爆実験で、多くの日本漁船が死の灰をかぶりました。第五福龍丸の無線長・久保山さんは放射線による病氣で亡くなりました。これがさっかけて、原水爆禁止運動が大きく燃え上がりました。

実父が若くして他界した後、一家の大黒柱として頑張っていた長兄に、結婚して一週間目に赤紙が来た。新妻と母、そして弟妹を残して断腸の思いで出征したと思う。頼りにする長男を御國の為とは言いながら戦地に送り出す実母の、胸が張りさける程に辛い切ないものであつただろう。然し当時はそんな感傷は決して人前では見せなかつたと言つ。母にとって、妻にとって何と言う苛酷な時代であったのか。

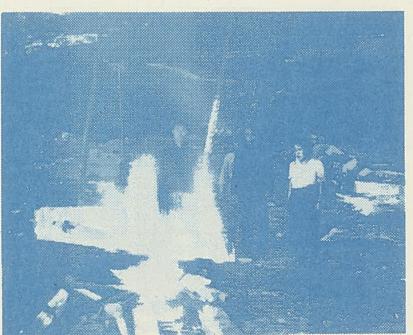
昨年十月に私達の旧村の墓地に、念願の戦没者の靈名碑が建立された。その陰に遺族の方々の長年の悲願がありやつと結実した。

昭和十四年以降の戦没者五十三名、若干名と一人一人の名前が刻み込まれている。

除幕式の日、私も出席させてもらった。年老いた女性が多かった。私も戦争未亡人ですと私の隣りに腰を曲げて、やつとの思いで座つておられる老女がそっと小声で言われた。その姿に私は実母が重なつて來た。まるでお祭りの様に賑々しくお見送りした沢山の出征兵の中に、きっとこの方の御主人もおられたのだろう。幼子を背負い悲しさ一杯で夫を見送る姿と、今、靈名碑の前で手を合わせる老女。流れた長い戦後、歩まれた人生の重さに私はどつと流れる涙を押さえる事が出来なかつた。



久保山愛吉さんの葬儀 写真提供：毎日新聞社



長崎●浦上町 撮影：松本栄一

「おばあちゃん、元気で長生きして下さいね」と声をかけるのがやつと
であった。

平和な国の礎となりて逝きし

尊きみたまよ 合掌

靈名碑の後に刻まれたこの言葉に私は胸が熱くなるのを覚えた。

花の中で桜の花は下に向いて咲いている。しだれ桜はあたかも握手を
求めるかの様に手をのばして咲いている。懐しい恋しい、あの人この人
に、今春咲いた桜の花は逢えただろうか。私は戦争体験者として、おぼ
ろげな幼い日の思い出であったとしても、覚えている事は子や孫に語り
継いで行かねばとひしひし思う。御蔭様で、有難う御座居ます。どうか
安らかに、御冥福をお祈り致します。

戦争は憎むべき「負の遺産」

堺市 辻川 美喜子

後に「大阪大空襲」と呼ばれる、昭和二十年三月十三日、深夜の出来
事です。

四歳の誕生日を迎えたばかりの私は、空襲を知らせるパーというサイ
レンの音で目が覚めました。と同時に、突然、玄関の戸を激しくたたく
音がして、「安部さん！ 安部さんの奥さん！ 隣の飯田です。向かいの家
が燃えています。早く避難して下さい！」との大声に、母は「火事ですか！
火事ですか！」と表の玄関に走り寄ってきました。

小学校一年生だった姉と私は、真暗い部屋の中で急いで上着を羽織り
ました。(大阪では二月頃から夜になると頻繁に警戒警報や空襲警報の
サイレンが鳴り、その時にはいつも防空壕に入っていたので、寝間着に

着変えいで服を着たまま寝ていました)。避難する時にめいめいが持つ
て出るよう決められていた布袋のかばんを肩にかけようとしている時、
母が私たちのところに戻ってきて、「あなた達ふたりは先に飯田のおば
さんに連れてもらって一緒に逃げなさい！ お母さんはこの家が空襲で
燃えないように守らなければならぬし、屋根に水をかけてから飯田の
おじさんとすぐに後から追いついて行くから！ きっと行くから！ い
い子だからおばさんのおっしゃることをよくきいて、かしこい子でいな
さい！」と手をにぎって私と姉に言いきかせて、「一人の子供のことを
よろしくお願ひします」と飯田の奥さんに深々とおじぎをしました。そ
して母はふたりにそれぞれ防空頭巾をかぶせると、ひもをしっかりと結ん
てくれました。

私と姉は、いつもとは違った緊迫したおとなたちのようすに不安を感じ
ながらも、手を引かれて家の表にでました。そして驚きました。表
通りには、市電のレールが四本も敷いてあるので、向かい側との距離は
かなりあつたように思いましたが、家の中から外に出た瞬間、表通りは
そして、熱風が身体中に吹きつけ、顔が焼けるように熱くてたまりませ
ん。この時私は幼な心にも今大変なことがおこっているのだと思いま
た。「こわい！」と一瞬、足がすくみましたが、あとは無心に恐怖感も
なんにも感じる事もなく、ただひたすら両手でおばさんと姉の手につか
まって、火勢の弱い所やまだ燃えていない場所を目指して無我夢中で人
の流れに混つて逃げまどいました。その間に人々の前や後ろの方で、
空から焼夷弾が花火のようにキラキラ光りながら落ちてきました。ザーッ
という音がして、大雨が降つてゐるようです。前を走つていた人々が
防団の人でしょ、メガホンで「危険だから防空壕に入つて下さい！」
と叫んでいます。ようやく防空壕をさがして入ろうとしても、もう



広島●天満町 絵：小野木明

あぶらの浮いたまま飲みました

〔長崎・平和の泉の碑文〕

水を求めて

水槽には三人、四人と
水をもどめて重なりあって
死んでいる。
倒壊した家の中にも
傷ついて横たわっている人。

のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて



広島●絵：古川正一

母の声を背に
一瞬にして倒壊した家屋。
くずれた屋根瓦、屋根板、土壁。
建物の下のわずかな空間に
上向きに倒れている母を見つけた。
顔中血だらけで
横を向くこともできず
「肩のあたりをおさえつける物を
のけて——」

という母の声が聞こえた。
だが、どうにもできない。
火が回ってきた。
最後の別れの言葉をかわして
私は逃げた。

ピースおおさか

JR環状線・地下鉄「森の宮」駅下車5分
大阪城公園南隣にある平和資料館

ピースおおさかを見学したのは、これで三回目になります。戦後五年もたつと、日常の生活の中で戦時中の事を忘れがちになり、あの空襲のひどかった事や、戦後の食糧不足で毎日難炊ばかりの生活だった事など、ここへ来ると当時の事を思い出して感慨無量になります。人によっては、目をそむけたくなるような展示物に、二度と行きたくないと言ふ人もいますが、私は、あの戦争があつたからそしてあの苦しみがあったから、今の平和な日本ができたのではないかと思うのです。

様々な展示品の中に戦時中の民家がありましたが、外に防火用水やバケツ、火ばたき等がおいてあり、部屋の電灯に暗幕をかけた暗い部屋で

「ピースおおさか」を見学して

東大阪市 渡辺 トキ子



写真提供：中国新聞社

【原爆に夫を奪われて】

木津川に入つてあれから満潮になり、流れに足をとられて水死した人が多數いたとのことでした。

私の四歳の記憶はここで跡絶えますが、最初の空襲で大阪市の大半が焼土となりました。私たち家族は命以外の物をすべて失いました。空襲は一晩で終りましたが、私の家族や大部分の人の苦労はこれから始まり長く続きます。八月十五日の終戦日までまだ多くの尊い命が奪われ、町が焼かれるのです。八月六日、広島に、又、九日長崎に原爆が投下され、その日から重い十字架を広島や長崎の人々が背負い続けることになります。

戦争は憎むべき「負の遺産」です。決して減ることはないと、うことを一人ひとりの肝に銘じて、平和を願う気持を育てていかなければならぬと思います。

木津川に入つてあれから満潮になり、流れに足をとられて水死した人が多數いたとのことです。

私の四歳の記憶はここで跡絶えますが、最初の空襲で大阪市の大半が焼土となりました。私たち家族は命以外の物をすべて失いました。空襲は一晩で終りましたが、私の家族や大部分の人の苦労はこれから始まり長く続きます。八月十五日の終戦日までまだ多くの尊い命が奪われ、町が焼かれるのです。八月六日、広島に、又、九日長崎に原爆が投下され、その日から重い十字架を広島や長崎の人々が背負い続けることになります。

戦争は憎むべき「負の遺産」です。決して減ることはないと、うことを一人ひとりの肝に銘じて、平和を願う気持を育てていかなければならぬと思います。

墓の中身は空っぽじや
夫も息子も帰つてこんじやつた。
探し歩いた私や娘まで
原爆症で寝込んでしもうた。
生きどるのか死んどるのか?
分からん者の葬式は出せんのじや。
しどうもない。
墓の中身は空っぽじや。

〔95年11月7日、国際司法裁判所における伊藤一長・長崎市長の証言〕



長崎●爆心地付近 撮影：山端庸介

すでに人でいっぱいで、ひとりとして入れる余地はありません。しかたなく別の防空壕を探し歩きながら、いつのまにか行列は川に向かっていました。

私たちは千代崎橋のたもとに来ていました。木津川の川岸や川岸近くの水の中にはもう人がいっぱいで、ここも入れる隙間などありませんでしたし、警防団員の人に「子供連れは川の中に入つてはいけない」と言われたので、また人の流れの中に入つて逃げました。どれ位の時間が経つたのか分りません。あんなに燃えさかつてた火勢もだいぶ下火になりましたし、もう空からは焼夷弾も落ちてこなくなりました。人の動きにもすこし落ち着きがでてきました。ようやく人々は走るのをやめて、お互にほっとした顔を見合わせ、東の空がしらじらと明けていくのをみんなで眺めました。

一晩中私たちは、大阪の町のどのあたりをどう逃げまわったのか分りませんでしたが、いつのまにか焼け跡になつてしまつた自分たちの家の近くにきていました。そんな時ある人が、近くの大阪ガスの会社が焼けのこつていて、そこに被災した人々が多数集つていると教えてくれました。幸いガスタンクに爆弾が落ちなかつたので、会社はそのまま残つていました。会社の広い事務所には、横たわっている人、ぼーっと座つている人、めいめいの格好の人でいっぱいでした。飯田のおばさんが「ここでお母さんを待ちましょう。もし無事だとさがしに来てくださいから…」。それからすぐに、信じられないくらい早く、母と飯田のおじさんに再会したのです。母は何度も泣きながらお札を言いました。おばさんも「ふたりのおじょうちゃんのお陰で命がたすかりました。もう駄目だと思った事が何度もありましたが、なんとしてもふたりを助けなきゃという想いでした。もしわたしひとりだったら、とっくに諦めて死んでいたところです」とおっしゃいました。

私達は五人とも幸いにも大きな怪我もしないで逃げる事が出来、奇跡的にもあの状況の中で母に会えた事、命の恩人飯田夫妻にずっと感謝しています。後で聞いたのですが、防空壕に入つていて爆死した人、又、

見てください

この子どもたちに何の罪があるのでしょうか……すべての核保有国の指導者は、この写真を見るべきであります。核兵器のもたらす現実を直視すべきであります。

そして

あの日

この子らの前で起きたことを知つてほしいのです。

この子らの無言の叫びを感じほしいのです。

一升びんの玄米をついていた当時の自分の姿が見えるようでした。

その頃、十五歳の女生だた私は、学徒動員で飛行機の部品を学校工場で生産していました。服装は、上着は制服でしたが下はもんべ姿、頭には白鉢巻きで、朝、作業前に竹槍で鬼畜米英、撃ちてし止まんと藁人形をついて教練したり、バケツリレーの消火訓練をしてから仕事をしていました。今考えると笑ってしまうような事を真剣にやっていたのですが、いざ空襲になると雨のように落ちてくる焼夷弾には、バケツリレー等する間もなく、逃げまわって防空壕に飛び込むのが精一杯でした。そのうちに飛行機の部品作りから十條の砲兵工廠に変わり、大砲から機関銃の弾丸の検査をする仕事を終戦になるまでしていました。勤務は三交替で私達女子も夜勤をする事になり、眠い目をこすりながら働いていました。

サイパンやグアム島が陥落すると、益々B29の空襲が激しくなり、防空壕で夜を過ごす日が多くなり、艦載機の機銃掃射に身を伏せて震えあがったりしました。

資料によると、東京空襲は昭和十九年十一月に初めての空襲から終戦の昭和二十年八月十五日迄の九ヵ月間、述べ百三十回、死者は約十一万五千人、戦災者約三百十万人、焼失家屋約八十五万戸（橋本明著『平成の天皇』より抜粋）にもなったと書かれていて、東京の空襲がどんなに烈しいものであったか窺われます。

殊に三月九日夜から十日未明にかけ、B29による大空襲では、本所、深川、浅草など城東方面が多大の被害を受け、東京の大半は焼けてしまったのではないかと噂されました。

当時、私は池袋と板橋の中間に住んでいたのですが、すぐ近くのガスタンクの近辺に焼夷弾がバラバラ落ちてきて、家のまわりはたちまち火の海になってしまいました。「ここにいたら危いから、お前たちは逃げなさい」と父に言われて、母と一緒に防空壕から出て町の中を逃げ回つたのですが、市電が通る大通りにも、火の粉や、焼けた木ぎれが飛んで、さて、煙にはまかれるし、熱風には煽られるし、どこを見ても火の海で、

とても逃げきれないと母と話し合って「どうせ死ぬなら我が家で……」と家に引返しました。まだ寒いころだったと思いますが、父は防火用水の水をかぶって、屋根に飛んでくる火の粉を一生懸命に消していました。母も私も一緒になってバケツを運びました。そのうち夜が明けて気がついたら、奇跡としか言いようのないよう、家の一角の五、六軒だけが残ったのです。近所の人たちと手を取り合ってお互いの無事を喜び合いました。「あの猛火の中を逃げ回って戻らなかつたら……」と後々母と話し合ったものです。

その後ひと月もしないうちに、強制疎開の通知が来て立退くことになりました。家具や荷物を運び出すのもやっとで、焼け残った家が引き倒された時は、もうもうとあがる土ぼこりの中で、思わず顔をふせて泣いてしまいました。

ひとたび戦争になると、一番の被害者は老人と子供たちです。戦後、戦災孤児が町にあふれ、上野駅の地下道に身を寄せあっているのを、よく見かけました。世相は食糧不足、それにインフレ等で、苦しい生活を強いられ復興するのに何年もかかりました。戦争の悲惨さを、第二次世界大戦で多くの国々の人が経験しているのに、宗教の違いや民族間のトラブルで地域紛争が絶えることがないのは悲しい事です。

私たちの地球が平和な地球になるのは、いつの日でしょうか。そのためにも、私たちが平和についてもっと真剣に考え方を持つように、大勢の人々に呼びかけていきたいと思います。



広島●撮影：菊池俊吉

『被爆者とともに』

どん底の苦しみ

夫は出て行ってしまった。
三人の子どもをかかえて生活はゆきづまつた。
失対労働と生活保護に頼りながら二坪の床にゴザ一枚と畳一枚を敷いただけの住居。
家財は寒さをしのぐ夜具一枚。
雨もりはひどいし傘もない。

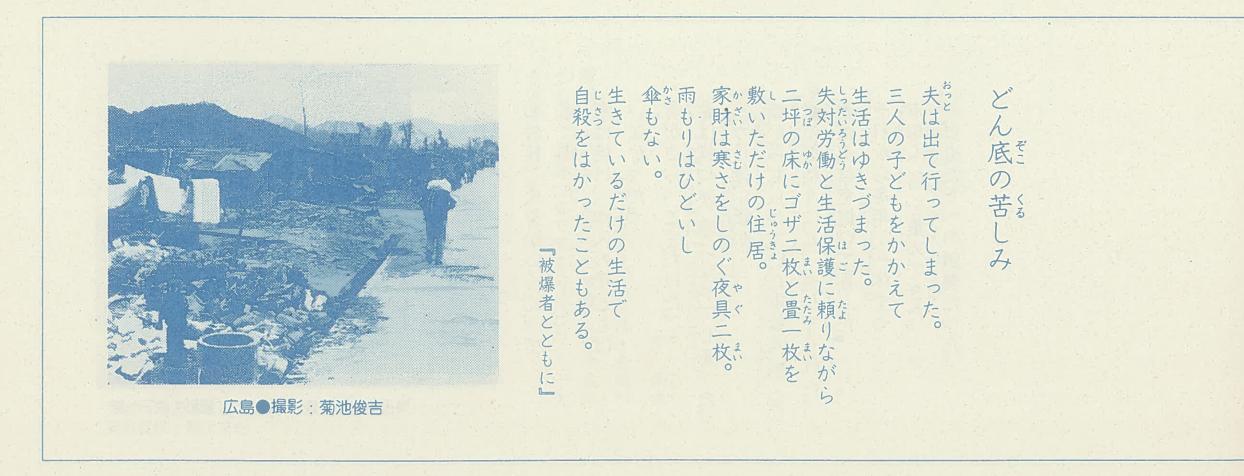
生きているだけの生活で自殺をはかつたこともある。



広島●御幸橋・撮影：松重美人

涙に曇るファインダー

御幸橋に引き返した。
カメラのシャッターが切れない。
「助けて」「水をください」と哀願するかすかな声。
動く気力もない母親の胸にすがる幼児。
小さい子どもを抱きかかえ
「目を開けて、目を開けて」と子どもの名前を呼び続ける半狂乱の母親。
頬に涙が流れ
ファインダーを透す情景が
まさに地獄だ。
はるなだ
うるんでいた。
松重美人



戦時下の暮らし

堺市 田窪 美智子

戦争時代を思い出してみますと、現在無事に暮している事を感謝いたします。

私の場合、昭和十六年十二月八日、小学校一年生の時に大東亜戦争が始りました。急に節約するようにと家庭の中が質素な気分になりました。例えば御飯にお麦をませるとか、お粥にはお芋を入れるとか、だんだんと食糧が足りなくなるとかで、空地にはさつま芋を植えるようになります。学校の運動場もさつま芋畠になり、朝礼は畠の道に並びました。

学校から田んぼにいなご取りに行き、とれた物を煎って粉にしたのをお屋のお弁当の時に給食の汁物に入れていきました。また、飛行機の油のたしになるため“ひま”の種を作る様に学校から家庭に種が配られ、できるだけ作って集められたりした事も思い出します。女の着物はモンペに変わり、学校行きは防空頭巾を持って行きました。行きも帰りも一年生から六年生まで一緒に並んで行きました。警戒警報のサイレンが鳴ると、勉強の途中でも家に帰り、その日はお休みになりました。

学校も家も和歌山城の回りの城下町でした。空襲警報が鳴り、焼夷弾が落ち、町中が焼けたのは終戦の年、広島に原子爆弾が落ちた少し前でした。昭和二十年、終戦の夏は、私と妹と二人で紀の川をこえた山の方の田舎に知り合いの人達と疎開をしていましたので直接には知りませんでしたが、川の向う側が真赤に燃えている感じだけが印象に残っています。体の気分が悪くて寝てしまいました。両親と弟は近所の人達と無事に逃げて、すぐに来てくれました。私の家の向いは焼けなかつたそう

です。

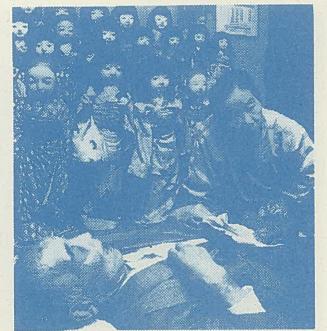
せまいながら田舎にバラックを建て、学校にも通いました。小学校五年生でした。六年生を過ぎると女の子は女学校に入学校するのですが、新制中学校になり共学になりました。駅まで歩いて電車に乗り、乗り換えてもう一つ市電に乗り、昔の小学校の続きの中学校に戻りました。皆元気で会いました。

田舎道を通る時は、田植えや稻刈りを見ながら、空気は良かつたです。レンゲ、タンポポも咲いていました。つくし、よもぎ、せり等もありました。田舎には水道がなくて井戸水を体験しました。露天なので雨が降るといっぱい水が溜るのでですが、お天気が続くと底の方にちょっとしか溜っていない状態になり、少しづつしか使えません。

お米の配給の分だけはいつも有りましたが、精米所に行って自分で機械にかけて、糠まで持つて帰るようになっていました。家の前の庭に野菜や花を植えていましたので新鮮な野菜を食べる事が出来ました。町の方には闇市が並んで父が肉を買い、私はお豆腐を買って帰りすきやき等しました。食器等買う世話をする人がいて、何とか買つたりしていました。布地も売りに来て、色々と買いました。母がミシンで何でも縫つて間に合せてくれました。

高校一年生の夏は、大阪に引越しして来ました。

戦争のおかげで現在の子供達と違った生活を体験しました。戦争はいやです。失った物は数々有るし、世の中全体にもつたいないことだと思います。現在の文化の発展を感謝し、平和を守つて暮したいと思います。



埼玉・藏満良雄・モタ工さん 撮影：森下一徹



李さんの遺体を追つて泣く娘の淑徳さん(ソウルで)
資料提供：草土文化

韓国被爆者の叫び

死んだら、私の身体を日本大使館の前に置いてほしい。
私も恥ずかしいが、外国人だからといって放置した日本政府はもっと笑いものになるだろう。

母と子で見る広島・長崎
韓国から広島に徵用され被爆した李南洙さんは、全身マヒで苦しみつづけ、一九七五年三月死亡した。

この日の、火をかいくぐつて家に帰った。
家は焼け、四人の子どもはいなかつた。
骨がさらつとくだけた。
妻は放心状態になってしまった。
それから毎年、一体ずつ市松人形を集めてきた。
夫婦のかわりにと、返してくれた。
妻はそれを抱いて喜んだ。
夫婦はそれからもらっていた市松人形を夫婦のかわりにと、返してくれた。
妻はそれを抱いて喜んだ。
夫婦はそれから毎年、一体ずつ市松人形を集めてきた。
夫婦はそれからもらっていた市松人形を夫婦のかわりにと、返してくれた。
妻はそれを抱いて喜んだ。
夫婦はそれから毎年、一体ずつ市松人形を集めてきた。

私の終戦前後

貝塚市 披村 益子

はや戦後も五十有余年がたとうとしています。戦争も遠い過去のものとなつて参りました。

私の脳裏にある終戦、空襲のこわさ、おそろしさは、この世の地獄の様でした。

銃後の守りをしつかりしていれば必ずや戦いには勝つものだと教えられていました。物資は不足し、食糧も少なくなり、苦しい毎日でした。勝利の日までの合言葉で努力して来ました。

学業半ばにして動員され、きつい仕事も努力、辛抱きました。空襲の稽古、薙刀、竹槍の練習も何の役にもたちませんでした。月月火水木金金で努力して参りました。

八月十五日の朝、いつもの様に会社に出勤しました。一部の人は此の日の事を知っていたのでしょうか。何となくざわざわしていました。やがて十二時頃より、皆広場に集まるようにとの事でした。しばらくは何の事か理解できなく、ボツとしていました。戦争は終りだと言われました。

今夜からは電燈も明るくなり、喜こんでいました。今日からは空襲もなく夜中に起きることもいらなくなりました。ところが大変なことに水道が悪くなり、水もなく、井戸の有る所まで水を汲みに行くことになり、大変でした。その上、一時間後には停電しました。夜はロウソクで大変でした。そうしているうちに、ヤミ市が出来、日用品、食品など、あらゆる物が出てきました。でも高くて、給料は安く、欲しくても買うことができなく、大変な日々でした。

七月二十七日には進駐軍が上陸してきました。国防色した服・戦車、大きな人、なんとなく、こわいような氣で見ていました。口をきいてはいけないと、だまつて見送っていました。

それから四、五日たちますと、会社の一部を進駐軍に渡すことになり、何となく会社に行くのがこわくなり、二、三日休んでいました。でも元気を出して出社することにしました。心配していましたが、進駐軍は手上に日本語を話していました。少し安心しました。でも眼の色も違い、何となく近よりがたい気持でした。着ている服もとても良く、お菓子や色々な物がありました。でもこわくて近よることは出来ませんでした。持てる国との戦いでしたから、負けるのもしかたがないと思いました。くやしい思いでいっぱいでした。でも元気で今日まで生きてこられたが良かったと思います。

眼の前で傷つき、焼かれた父

堺市 嶋田 寛子

昭和二十年八月六日午前八時十五分、私の脳裏に灼きついて消える事のない数字です。

八月六日の空は本当に雲一つない澄みわたった綺麗な空でした。その日は疎開先で小学校二年生の弟が急性肺炎になりました。母が看病に行き、家では父と私の二人でした。当日の朝は警戒警報も空襲警報もでていませんでした。朝食を済ませ出勤前の父と庭に面した南側の座敷で話をしておりました。その時爆音は耳にしておりました。B29という飛行機はキーンと高い金属音が特徴でした。「今のはB29の音だね」と父に言い



長崎●渡辺千恵子さん 第14回原水爆禁止世界大会 撮影：村尾 実

生きていてよかつた

原爆犠牲者は
もうわたしたちだけ
たくさんです。

世界のみなさま
原水爆を、どうかみんなの力で
やめさせてください。
そして私たちが

「生きていてよかつた」
といえる日が
一日もはやく実現できますよう
お願いいたします。

一九五六年、第二回原水爆禁止世界大会での長崎の被爆者、渡辺千恵子さんの訴え。



アメリカの被爆兵士・スミザーマンさん 撮影：連合通信社

アメリカの被爆兵士

アメリカ海軍の消防兵だった。

一九四六年七月

ピキニで原爆実験に参加した。

爆心から約三十キロで爆発を見た。

十時間後に爆心の島で作業をした。

一ヵ月後、両足に浮腫が始まり

左足切断。一年後には右足も。

病名は「悪性リンパ腫」。

四年後、左手にも浮腫。

二年後、切斷が宣告された。

こんな被爆兵士が

数十万人も苦しんでいる。

証言 ジョン・スミザーマン

アメリカの一連の核実験に立ち会わされ、爆発後に突撃訓練、火災処理などをさせられた兵士は約三十万人。スミザーマンさんは、八三年に直腸ガンの全身転移で、五四歳で死亡。

ました。成層圏を飛ぶトレーダーに入らないのだと聞きましたが、その瞬間、物凄い閃光と同時に竹藪の中を吹く恐しい力の風に、足許からさらわれる様な感じがしました。

何がおきたのか解らないまま夢中で南から閃光を見たのですから、北に向いて走りました。座敷を二間抜けると廻り廊下になつてまして、廊下をくるくる飛ばされて炊事場の土間にたきつけられておりました。窓硝子も瞬時に粉々になつたのでしょう、顔も手足も血だらけになつていました。勝手口を抜けだして裏庭にまわりましたら、庭の池も瓦やごみでいっぱいになつていました。

手足の血を洗つてこわれた座敷の方へ行きますと父が倒れておりました。廊下とのあいだの部屋を抜ける事が出来なかつたのでしようか。廊下まで出れば廊下は柱が多いからこわれにくいでしようね。二階建ての家でしたから何かが落ちて来たのかあまり傷はないのですが、左胸、丁度心臓の位置ですね、深さが五、六センチに長さ十センチ位二つに割れています。不思議な程血はでていませんでした。父は「お父さんはもう駄目だ」と言いました。私は訳のわからぬ恐怖にかられて外に飛び出しました。五分か十分して又、父の傍に戻りましたが、父はもう息を引きとつっていました。

隣の人が私の傷を三角布でくつて下さいましたが、皆人のことにしまっておれなかつたと思います。表札等黒くこげてました幸い火災にはなりませんでした。黒い雨が降るって本当ですね。短い時間ですが降りました。夜は近所の方の家の隅においていた様に思います。翌日、近所の方が父を戸板に乗せて、市立第二中学校に運んで下さいました。中学校の校庭には何百もの死体が並べてありました。家の外で太陽の光線を受けていた人は一瞬にして全身火傷です。着ていた服は全部焼けて皮膚と肉とが離れ、透明のビニールの袋をかぶせた様な状態で死んでます。本当にこの世でおきている事とは思えません。検視が済まないと焼く事が出来ませんので何度も見に行きました。誰かに助けてほしい、誰かにすがりたい。そんな時、県庁の父と同じ課の方が来て下さいました。

たのですが、何を話したかもおぼえていないのです。その方も助けを求めておられたのかもわかりません。伯母の家が市電の紙屋町停留所を少し西に行つた所にあるからと思いつ歩いていきましたが、一面焼野原で伯母の家の屋根瓦一枚も残つていません。爆心地に一番近い所だった様です。市電も朝通勤の人を乗せて走っていたのでしよう、鉄の枠だけが残つていました。歩いている人は虚ろな瞳でとぼとぼと力なく歩いてます。肉親をなくしたか探しているのか、私も人の目には夢遊病者の様に見えた事でしょう。

三日目か、四日目か、検視が渋んだらしく茶色の封筒がおいてあります。中学校のグラウンドの隅に当時建物疎開の木が沢山ありましたので、近所の方が木を積んで下さつて父を荼毘に付しました。父を焼く悲しさとつらさ、悪い事をしている様な気持でした。翌日路地にころがつていた小さな木箱、盆か何か入つていて箱だと思いますが、父の骨をひとりで拾い、悲しみとつらさと、言えない何かを胸に抱きました。

幾百の死体のならぶグランドで

少女は焼きぬ父の屍を（十六才の自分をみつめて）

吾が手にて荼毘に付したる父の骨

カタカタ鳴りぬ箱に拾えば

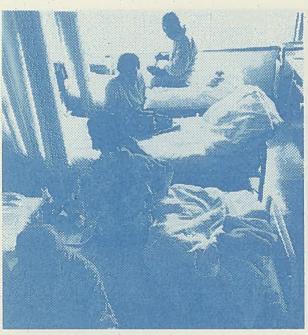
一滴の涙もいはず少女には

父を葬むる重荷に堪えいて

電信交通が一切途絶えておりましたから何日目でしようか、汽車がどこからか動いている様だとの事で己斐の駅まで歩きまして多分現在の西広島駅だと思います。無料で汽車に乗せてもらいました。広島県比婆郡東條と言います。どこで乗り換えたのか、汽車で座つて行けたのか立つていたのか、記憶が全然ないのでした。ただただそこまで行けば母がいる、それだけでした。母の顔を見るまで一滴の涙も出ませんでした。当時女学校三年生十六歳の私には、父親の死体一つをどうしたら

入退院のくり返し

父は二・五キロで被爆。
ガラスの破片でけがしたが生死不明の息子を探して一週間、市内を歩き回った。
八年ぐらいたつたころ突然、食欲がなくなった。
胃ガンだった。
いろいろのところがガンになり五年間、入退院を繰り返しどうどう亡くなりました。
医療費で、家のおかねは全部なくなりました。



長崎●日赤原爆病院 撮影：松田 宏



証言・福田良式

写真提供：東友会

いいのか他の事を考える余裕はありませんでした。母のいる東條へ行けたのは二十年の八月十四日位だと思いますが、終戦のラジオ放送は聞いておりません。

帰つてこなかつた父

藤井寺市 西嶽 美八子

私の父は、昭和十九年五月頃に、自分から志願して戦争に行きました。生まれて二ヵ月になつたばかりの私をほおずりしたり、別れるのがとてもつらそうでした。しかしなく戦地に行つてしましました。母は私の写真を戦地に送りました。本人に届いているのかいなかわからぬが、それでも母は送りました。きっと帰つて来る、帰つて来たら南の国で食堂でも開いて親子三人でくらしましようと言つてました。

昭和二十年八月十五日、終戦をむかえました。死んで帰ると言つて出かけたはずの叔父が生きて帰つて来ましたが、かならず帰ると言つた父は、帰つて来ませんでした。

今までの話は母から聞いた話です。でもこれから書く話は、私自身が今もはつきりとおぼえている話です。

三歳になるかならないぐらいの時だと思いますが、ある日、母と叔父につれられて電車に乗りました。私はとてもうれしくて、おにぎりを作つてもらつてたべました。電車にのつてついた所が、大きなカウンターのある本当に大きな広い所でした。たくさん的人がいました。母はそこで男の人から、白い布に包んだ箱をわたされました。大切に胸にかかえています。私はおにぎりを食べてはしゃいでいます。帰りにまた電車になりました。まわりの人が声をかけてくれました。「おさのどくですね」

とか手を合わせてくれました。

家に帰つて箱を開けて、母は言いあらわせない気持でいっぱいでした。箱の中には、白い紙が一枚入っています。その紙には父の名前が書いてあつたそうです。何一つ父のものはありません。仏壇に一枚古ぼけた六センチ四方の写真があるだけです。私自身は父の生年月日も、もちろん顔も知りません。ふつとすることは、どこかの国で生きていて、私をさがしていくくれるのではないかと思う時があります。みんな夢です。

母と、目の見えない祖母と、叔父と、私と暮らした日々、母と箱車を引いて、お百姓さんの所に母が着物をたくさんもつて行き、お米とかえっこしてもらいました。こっそりもつてかかるのです。おやつも、かぼちゃのたねを食べたりしました。

就職も父がないために入れない会社もありました。でも今は遠い思い出です。わざることの出来ない思い出です。今の私は、孫一人にしたわざてしまわせです。九人家族で毎日いそがしい日々を送っています。

母と妹と焼夷弾に逃げまどう

東大阪市 中井 光子

悪夢のような日が、五十年経った今でも昨日の出来事のように思い出せます。

当時は天王寺の生魂神社の近くに住んでおりました。あの日はいつものように、家の中央に掘られていた防空壕の中で母や妹達、近所の人と息を殺して入っていました。時々どんどんと大砲の音が聞こえて来ます。警防団に入っていた父が、「早く外へ出ないと蒸し焼きにされるぞ!!」と緊迫した声で入って来ました。その場に居た人はいっせいに外へ



厚生省前すわり込み 80年11月 撮影：森下一徹



日米合同原爆調査団(後にABCC設置) 写真提供：毎日新聞社

ABC-CI アメリカの原爆傷害調査委員会

被爆者はモルモットか

とつせん、ABC-CIから呼び出しがありました。原爆の後遺症が心配でした。治療してもらえると思って出かけました。着ているものを全部脱がされ全身を検査されました。治療は一切してもらえませんでした。十歳で被爆した近所の娘さんは体毛の発育状態まで写真に撮られたと泣いていました。私たちは、アメリカのモルモットだったのです。

ヒバクシャは静かにそして怒りをこめてすわるなぜに政府は今まで国家の戦争責任を認め被爆者を救援しようとしないのか広島・長崎の無辜の二十数万の国民の命が奪われいまなお三十七万のヒバクシャがいのちとくらしをおびやかされ放射能の後遺という重荷を背負わされ……
〔80年11月行動厚生省前すわり込みで〕

とび出しました。なま暖かい風が吹いて空は不気味なピンク色に染まり、あたりは煙でぼんやりかすんで見えました。警防団の人の指図で原っぱに出ました。母は、私と三つ下の妹と、背中にもう一人の妹を背負って、着のみ着のままに出たのですから家へ取りに帰ろうと思つて、私と妹二人に「この場所を動いたらあかん」と言つて立ち去ろうとしていた時、かすりの上衣、もんぺ姿の若いお母さん風の人が「としお！としお！」と絶叫しながら走つて来ました。人々が右往左往する中で返事をする人は一人もおりません。「としお！としお！」その声は私を不安と恐怖におとし入れ、歯をガチガチいわせておりました。母も、足がすくんで動かれなかつたと後日言つておりました。間もなく、その場所もあぶないという事で別の場所へ移動させられ、ふわふわと降りてくる焼夷弾の中を逃げまどいました。どの様にして父方の里でもある大和上市の駅に着いたか記憶にありません。これから先、疎開者に対する偏見とすさまじい飢えに見舞れるのも知らずに……。

私の母は七十五歳で亡くなりました。戦争は母の命を十年は短くしたと今でも思つております。

空襲下の國民學校そして中学生

堺市 岩田 孝

一九四五年（昭和二十年）三月十三日（火）、大阪市の國民學校（今の小学校）は、卒業式の前日であった。数週間前、集団疎開先の泉大津市助松から卒業式をむかえるため、私は自宅にもどつていた。

六年生の教室は、講堂の二階にあった。疎開に行く前（一九四四年、一学期）は、六クラスあったのが、男女それぞれ一クラスになつていた。「明日は卒業式だから、卒業証書といつしょに、この通知票もわたすからな」。学級担任のK先生はそうおっしゃつて、通知票を教室の戸棚にいれ、鍵をかけられた。そのときは、その通知票も卒業証書も一度と見ることなんかできないなんて思いもしなかつた。

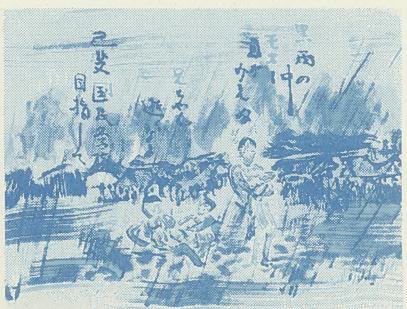
B29（アメリカボーリング社の長距離爆撃機）の大編隊が大阪を襲つたのは、その日の夜であった。ラジオの情報が流れる。「中部軍管区情報、潮岬南方に敵編隊があり、北に向かつている」このときは、まだ大阪がターボゲットであろうとは思いもしなかつた。B29の編隊は超低空で焼夷弾（木造家屋を燃やすための油脂焼夷弾）を落としはじめた。

当時國民學校三年生（今の小三）であつた妹や小さな子ども達は、近くの住吉大社へと避難していった。焼夷弾は、ちょうど打上げ花火が空へと上つていくのとはさかさまに、上空から地上へと火の雨をふらす。遠くから見ていると、大変きれいだが、自分の頭の上へ落ちてくると、話は別。

学校は、三百メートルほどの南の方にあつたので、まっさきに火の手があがつた。自宅から学校が見えるなんて、それまで何年も考へても見なかつたのに、まるで紙細工でも燃やすように、映画の一シーンながらに、学校は六年間の思い出と過去の記録、そして卒業証書や通知票と一緒になにもかも永久になくなってしまった。

さて、次は私達の出番。当時私は、両親と下の妹と四軒長屋の借家に住んでいた。紀州街道に面して大家のMさん宅があり、その西側に土蔵、そして私達の家があつた。

その大家さんの家に焼夷弾がまともに落ちた。あつという間に勢いよく



広島●己斐付近 絵：名柄規四郎

黒い雨

従兄は銀行の地下室にいたためにやけど、かすり傷一つ負わずそのまま黒い雨の中を歩き続け夕方、わが家に帰り着きました。本人も家族も「運がよかつた」と喜んでいたのに「運がよかつた」と喜んでいたのに一ヵ月後、高い熱が出て髪の毛が抜け体じゅうに斑点が出て結婚もない若妻と赤ん坊を残し亡くなってしまいました。



写真提供：東友会

く火の手があがった。肝心の水道は、すぐとまってしまった。

もちろん、消防車なんてくるはずもない。家の前にあった井戸ポンプを使って隣組の大人の人達と一緒に消火活動に加わった。いわゆるバケツリレーである。しかし、火の近くにいる人はもちろん長くはいられない。あの日は寒かったが、頭から水をかぶつても、すぐに乾いてしまうどうにもならない。

それでも必死になつてポンプを動かし、バケツで水をはこび、とにかくみんなで頑張った。明け方までかかって、燃えるものはすべて燃えつき、土蔵のおかげで類焼はまぬがれることができた。

避難していた妹が住吉大社で高射砲弾の破片をあごに受け、近くの病院でローソクのあかりで麻酔なしに手術を受け、「痛い」ともいわなかつたと聞いたのは、その後のことである。今でも妹のあごには、その跡がのこっている。

明るくなつてから、自宅横の路地を見ると不発の焼夷弾が不気味に転がっていた。これがもし不発弾でなければ、消火活動どころではなかつたかもしれない。多分防空壕の中で黒こげになつていたのではないか。

この空襲のおかげで、中学校（旧制一五年間在学する）の入学試験は中止となつた。三百五十人の募集定員のところへ四百七十人の中学一年生ができあがることになる。それでも、三年生以上は学徒動員で学校にはいない。

当時学校では、信太山の通信連隊が教室を使っていた。そのおかげで、P-51の機銃掃射を受けることになる。つまり、授業中、突然、ガラスを百万枚、一度にわつたような音が連續する。あわてて机の下にもぐり込む。しばらくして隣の山にあるホラ穴へ避難する。その途中で見たものは、担架にのせられた真赤な肉の塊であった。屋上で小銃を使って飛行機をうつっていた兵隊さんを思い出す。

今はもうとりこわされて残つていらないが、ぶ厚い鉄筋コンクリートに、入口五センチ位、出口五十センチ位の穴があいていたのを思い出す。

電車の連結機にブラ下がつて通学したとともに、二度と再び次世代に経験させたくない思い出である。

火の海の中をはだしで…

大阪市 井村 ひろ子

今年七十六歳の老人です。

昭和二十年三月十三日の大阪空襲の時、櫻川の家で空襲に遭いました。最初は表できれいな星で、流れ星の様に見えていましたが、その内に家の真中に焼夷弾が落ちて家中は火の海でした。

私はカバンの中に何時も肌着を入れていました。何時空襲が来るか分からないので、その日の御飯をオニギリにしてカバンの中に入れています。父は前日に配給があったのでそのお米をひきずつて逃げました。

私は靴をさげてはだしで逃げて行きました。広い大通りでしたのに両方から火の海で、逃げるのが精一杯でした。前に妹をネンネコでおぶっていた母のネンネコが火で中の綿が見えていたのを覚えています。

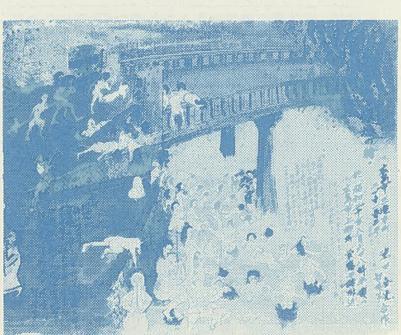
櫻川から上六まで歩いて行く途中の湊町で、水槽にすわつてお弁当を食べている時に、通る人が乞食の様に見えていたのをなきなく思いました。上六の駅で最初の避難者で無料の切符を頂きました。

私はその時、春日出の大坂製鎖造機という会社に電話交換手として勤めていました。その時の設計課長だった石切の方のお家で暫く厄介になりました。

その時下的弟が青年団で大阪に残っていて、今里まで電車が通っていましたので今里から櫻川まで歩いて行きました。その途中幸町附近では真黒になつた男女の死人の山でした。その間を夢中で歩きました。弟が立葉



広島●絵左：武次チヨ子 絵右：松室一雄



広島●宍橋西詰 絵：池田金光・智枝子

川には
人間がばたばたと
飛び込んでいた。
ほとんどが
死んだ子供を
どこで焼こうかしら……

狂人のように
わが子の首のないもの知らず
狂人のようになって逃げる
母親。

眼球のとび出した重傷の将校が
どつぜん起き上がり
軍刀を抜き
「突撃」と叫んで走った。
そのまま崖下に落ちて
命を断つた。

川

川には
人間がばたばたと
飛び込んでいた。
ほとんどが
死んでいる人
うめいでいる人
男女の区別さえつかない
死んでいる人
水をほしがる人
がむしゃらにさけぶ者——
この姿を見ない者には
話してもわからない。

'98 夏の班長会・班会 お店組合員のつどい 平和学習資料



沖縄・名護市 キャンプシュワブ…立入禁止の鉄条網

世界で大きく前進する反核・平和のとりくみ。世界の世論はアメリカによるイラクへの武力行使を許しませんでした。世界の人々が力を合わせれば、核兵器廃絶を実現できる展望がひらかれつつあります。しかし、核兵器大国とよばれる国々は、核兵器廃絶に背をむけ続け、そのことを理由として、インドが核実験を強行し、核兵器保有国の仲間入りを宣言しました。

いまこそ、核兵器の即時全面禁止を求める運動が一層重要になっています。

ヒロシマ・ナガサキ以降、核兵器実戦使用を許さなかつた反核・平和運動の出番です。

そんな中で、唯一の被爆国・日本では、日米新ガイドラインがつくられ、国民が知らない間に米軍の武力行使に日本が協力させられるのではないか等の危惧が高まっています。

各家庭で、地域で平和について学び語り合い、草の根運動を大きく広げていきましょう。

小学校で元気で居った時はだき合って泣きました。その弟も現在七十三歳で大阪にあります。弟と二人で焼けた家を見に行きましたら、二階から落ちたセトモノの硝子が重なって落ちていました。その後何度も会社に行く時に京橋で途中下車して避難した事が再三でした。

会社は真珠湾攻撃の時使った爆弾を造っていた会社です。西九条で朝おりた時にあった環状線の電車がとんで、何にもありませんでした。途中何度か防空壕に入ったのを覚えてています。

私は年頃でしたので、母が着物を石切へ疎開させておりました。終戦になって母の妹が尼崎におり、その家に暫くいました。その後、父の兄が大正橋で相生席という芝居小屋をしておりました。尼崎より少しの荷物をリヤカーにつんで歩いて来ました。その小屋の客席の二階で生活していました。食べる物がないので私の着物を闇市へ売りに行きました。

また、五人兄弟の一一番上でしたので南瓜、玉葱、メリケン粉等、貝塚へ買い出しによく行きました。最後の時に難波の交番所で“買い出しのおばはん”と言われ、母に「もう二度と行かへん」といったのを覚えています。雑炊の券をならんで貰ったり、魚を上六百貨店へならんで買いました。杂炊の券をならんで貰ったり、魚を上六百貨店へならんで買いました。その時の事を考えるとどんな辛抱も出来ます。孫に昔の話をするとそれは昔の事、時代が違うと笑います。物を大事にしそぎて仕方ありません。でもなかなか捨てる事は出来ません。その様な時代だったのですね。

主人もノモンハンの生き残りです。戦死の公報が入って後帰って来ました。現在七十八歳で元気でおり、自分は一度死んだのだから長生きするんだと頑張っております。色々と苦労しましたが、三人の子供がおり、皆親孝行で私達は幸せ者だと何時もいっています。この先に子供達に迷惑をかけずに頑張って生きていきたいと思つております。

原爆と人間展

このパネルは、被爆者が自分の手でつくった、被爆者の証言を中心にした原爆展用パネルです。

“いづみ”では1セット購入し、戦争展や学習会で活用しています。お問合せは組織企画室まで。(TEL.0722-32-3011)

また職場等で購入する場合は、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)03-3438-1897までお問合せ下さい。

〈原爆と人間展〉
B2判(73cm×52cm) 40枚(うちカラー18枚)
1セット60,000円 税込・送料2,000円

